

## 『源氏物語』の「いとほし」が抉るもの

——「かわいそうで、見ていられない」心

今井久代

一、問題の所在——辞書の検討から

「いとほし」は古語のなかでもとりわけ解釈の難しい情意語であろう。いくつかの辞書を読み比べるほどに一層わけがわからなくなるその難解さは、Ⅰ語源がつかみにくい Ⅱ全く異なる二つの語義が並立している Ⅲ類義語「心苦し」との棲み分けがわからない の三つの理由によるものと思われる。現代では今ひとつわからないニュアンスを持つらしいこの語の背景には、現代では気づかない事態の捉え方、感情のつかみ方があるのだろう。

Ⅰ語源については、「いとふ」と同根、「いたはし」の転、の二説がある。「いとふ」説の山崎馨は、「目を背けたい」を原義とし、当初の「恥づかしく、わが身から目をそむけたいほど思ふ」（傍点稿者）が、「意味の重点が自己から他に移ると同情の意味が生じ」たとする。<sup>(注1)</sup>ただし『源氏物語』の用例を見ると圧倒的に他者への同情を思わせる状況が多く、『いとふ』はいやがる、きらうの意が中心であるから、『いとほし』とは直ちには結びつけがたい。『いたはし』の母音交替形とみるのが穏当であろう（『古語大辞典』小学館）という見方も生ずる。近年のジャパンナレッジ（日本国語大辞典）では、冒頭で「（動詞）「いとふ」から派生した形容詞）苦痛や苦惱で心身を悩ますさまを表わす」と語義を説明したのち、最後の語誌では『いたはし』の母音交替形と考えられているが」と説明を変えている。山崎

譬も先の文の先に「(いたはしと) 後世意味の混同を招いた」とする。しかし双方ともに語源というのも多少苦しい説明ではある。このほか、岩波古語辞典(大野晋。角川学芸出版の古語基礎語辞典も)は「いとふ」説、角川古語大辞典は「いとふ」説を最初にあげつつ「いたはし」説を異説として挙げ、古語大鑑(東京大学出版会)も「いとふ」を最初に挙げ、「いたはし」説にも言及しながら「この語の不快感を示す語義との連繋の説明に問題が残る」「動詞形『いたふ』の存在が認められない」と指摘する。なるほど「いたはし」が語源では、「心苦し」とのニュアンスの違いがなくなりそうである。とはいえ、「厭わしい」がどう「いとほし」につながっているのか、「苦痛や苦惱で心身を悩ますさま」(日本国語大辞典)「対象から目をそむけたくなる気持」(角川古語大辞典)とそのあたりはまちまちである。稿者は角川古語大辞典、あるいは「気の毒で、見ているのがつらいということ」(古語基礎語辞典)との理解を支持したいが、要はⅡ大きく方向性の違う解釈の対立とⅠ語源がいかに関結びつくかが肝要であろう。

Ⅱ解釈の対立とは、「(1)自分にとって面白くないと思う心情を表わす。つらい。困る。いやだ。(2)他人に対する同情の心を表わす。かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ。」(日本国語大辞典)のような、自分に向かう感情と他人に向かう感情の二つの方向性を言う。ただし「いとほし」の「自分に向かう感情」は、ほぼ他者と微妙に絡んだものである。

①法師は、せめてここに宿さまほしくして、頭かき歩く。いとほしけれど、また宿かへむもさまあしく、わづらはしければ、(源氏物語・玉鬘二〇五)

法師がせっかく上得意(右近)用に確保しておいた部屋を、事情を知らない下女が得体の知れぬ通りすがりの客(玉鬘一行)に貸してしまい、あわてふためく場面である。部屋に通した玉鬘一行を今さら追い出せない法師の善良さは好ましいが、しかしこのままでは年来の上得意の機嫌を損ねかねないと慌てる程度の計算高さはある。何とか部屋

を、と対応に追われる法師の心情は、まさに「自分にとっておもしろくない」「つらい」「困る」にあてはまる。しかしながら、この法師自身の心情が「いとほし」なのではない。ここでの「いとほし」は、その困り果てている法師を見ている、玉鬘一行側の心情を表している。

②身なり、いと悪し。あはれとは見奉れど、まつ、やむごとなき子どものことをするほどに、え心知らぬなり。よかるべきことあらば、心ともし給へ。かくてのみいまするがいとほしや(落窪物語・巻一)

この場面でも、ひどい身なりを父に見られている落窪君自身にも、つらい、困ったといった心情があるが、そうした落窪君の心情ではなくて、惨めな状態の落窪君を見ている父中納言の心情が「いとほし」である。(1)「つらい、困る」の大半は、いまつらく困っている、あるいは必ず困るであろうBの傍らで、Aが抱く「つらい、困る」なのである。(1)で言えば困っている法師を見れば自分たちが出て行くべきだが、もう新しい宿を探す気力もなくて困る、②で言えば惨めな身なりの落窪君に満足な衣装を整えてやるべきだが、家政のこともわからず困る、といったところである。こうした点が、「つらい、困る」を表す情意語として通常使われる「わびし」と「いとほし」との、決定的な違いである。「わびし」のつらい状況がA自身の中で完結しているのに対し、「いとほし」はほとんどがA以外のBに つらい状況があり、それと関わってAのつらさが生じている。

こうしてみると「いとほし」が生ずる状況は、類義語「心苦し」ときわめてよく似ていることがわかる。同じように、つらくて困っているBを前にしての、Aの感情となると、Ⅲなぜこの二語の使い分けが生ずるのだろうか。苦境に陥っているBへの情意ならば、当然(2)「かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ」となるうから、これが「いとほし」の中心的な意味と思えてくるが、そうなれば「自他の区別がなくなつて、他者の苦痛・不幸で心の痛む」(角川古語大辞典の「心苦し」の説明)同情や思いやりとどう違うのかということにならう。やはり「いとほし」は、(1)と(2)と

いう、一見すると全く違う二つの方向性を抱えた複雑な感情である点に勘所があるらしい。(1)と(2)の重なり合う心は、当然ただの「わびし(つらい、困る)」とも「心苦し(気の毒)」とも異なった、現代語では捉えていない複雑な感情であるに違いない。本稿では、(1)と(2)のどちらが「いとほし」の語義として適切かではなく、この二つの語義を含んで成り立つ「いとほし」のニュアンスを考えたい。その際には、「いまつらく困っている、あるいは必ずつらく困るであろうBの傍らで、Aが抱く感情」という、「いとほし」が出現する状況、人間関係に特に留意しながら考えていきたい。現代語に置き換えにくい「いとほし」という語を通じて、人間のどのような側面が捉えられ、どのような人間性を描き得ているのか。こうした問題意識に基づき、「いとほし」を以下考える。

## 二、自分と他人の関わり——自分のせいという心

『源氏物語』では、「なまいとほし」「いとほしげなり」「いとほしがる」等の派生語も含めると、全部で386例もの用例を確認できる<sup>(注3)</sup>。これらを調べてみると、すべての用例で、「いとほし」は他者のつらい状況に関わりをもつなかで生ずる感情と言える。近年陣野英則が「いとほし」のほぼ全ては「つらい、困る」と解すべきものと論じ、注目されているが<sup>(注4)</sup>、「困る」と訳すと、それはそれでこの語のニュアンスを取り落とす感が残る。それというのも、つらく困っているBの傍らでAが抱く感情が「いとほし」であり、A自身も困るとしても、それはAのみでは完結していない状況での「困る」だからだろう。本節では、「いとほし」の用例のなかでも「(1)困る、つらい」に分類されやすい用例を中心に、Aの困苦とBの困苦とが通底し合っている、「いとほし」が使われる状況について検討したい。

③ 惟光尋ねきこえて、御くだものなどまゐらす。右近が言はむこと、さすがにいとほしければ、近くもえさぶらひ

寄らず。(夕顔一六二)

夕顔のもとに源氏が通い始めた場面である。源氏は乳母が病臥の身を寄せていた五条邸の隣の夕顔の花咲く宿から、源氏を誘うような和歌を贈られたあと、その送り主の身元を惟光に探らせた。惟光は、その宿の女房の右近を語らつて恋仲になり、頻繁に出入りするうちに、右近たちは必死に隠しているが、主人格と思える女性が身を潜めていること、その女性は薄幸そうな美しい人であること、どうやら頭中将とかつて深い仲にあつたらしいことを突き止める。その報告を受けた源氏は、ではかつて頭中将が忘れがたいまま行方知れずにしてしまった常夏の女なのでは、と察して興味をもち、女のもとに通うようになる。実は源氏が通うようになった経緯は、「くだくだしければ、例のもらしつ」で省筆されてしまうが、通常のように歌のやりとりの末、女方の許しを得て通つたのではないだろう。それならば、女方が源氏の身元を知らず、あとを付けさせる事態にはならないからである。恐らくは『落窪物語』の道頼と落窪君のような形、すなわち何度も通つて勝手知つたる帯刀（惟光）があらかじめ主人の道頼（源氏）を邸内に引き入れて侵入ルートを教えたのち、自分は恋人のあこき（右近）のもとを訪れて一夜を過ごす、その間に言われた通り侵入した道頼（源氏）が強引に落窪君（夕顔）と契りを結んでしまう、といった経緯だったのでないか。ただし『落窪物語』と違うのは、最後まで惟光は光源氏とは無関係を装い、主従だとは女方に知らせなかつた点である。源氏が夕顔を皇室ゆかりの「なにがし院」に連れ出して、相手は光源氏だとわかつたのちも、主従ど知つた右近があれこれ言うのは「いとほし」なので、惟光は源氏の側にも奇らなかつた。身元を隠して通いたいという光源氏の意向に従い、惟光は夕顔への忍び歩きのお伴は隨身に任せた。

前置きが長くなつたが、ここでの惟光の「いとほし」は、光源氏の従者と知れて右近に言われるのは「困る」の意であり、ここで困る状態にあるのは惟光だけのように思える。だが果たしてそうであろうか。考えてみれば、身元を隠して通う男（光源氏）を、女たちが心底歓迎していたのであれば、惟光が主従関係を明かしても何の困ることはない

い。内偵して手引きしたのを感謝されこそすれ、責められはしないからだ。惟光が身元を隠し続けたのは、女たちが身元を隠して通ってくる男に、困り傷ついていたのを察していたからである。つまりここでの「困った事態」は惟光のなかだけで完結しているわけではなく、背後にもっと困っていた右近たちが居て、その事態に惟光は責任の一端を負っている。惟光の「右近が言はむこと、さすがにいとほし」には、主従と知れば黙っていた惟光を責めるだろう、右近への同情や申し訳なさが交じっている。換言すれば、同情や申し訳なさがあり、負い目があるからこそ、右近たちの言葉は耳に痛く、惟光は困るのである。夕顔巻はほとんどが光源氏側から語られており、夕顔側の思いについては筆が極力削られている。このため、身元を隠して通う源氏の不誠実な対応に、夕顔たちがどれほど傷つき絶望していたかが、特に現代の読者には見えにくくなっている。だがこの「わびし」でない「いとほし」に注目することで、不実な源氏の行動に傷つく女方と、その交際に責任の一端を感じていた惟光の負い目が読みとれよう。

続いては、「自分自身がつらい」の例に挙げられることのある次の例である。（註5）

④尚侍の君は、われかの心地して死ぬべくおぼさる。大将殿もいとほしう、つひに要なきふるまひの積もりて、人のもどきを負はむとすること（賢木一四六）

朧月夜との密会の場に右大臣に踏み込まれた場面が続く叙述である。「尚侍」と対比して「大将殿」の心情を象る叙述であり、①②や「つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく」（賢木八四）のように、「いとほし」が明確に他者と関わるのを示す叙述があるわけではない。このためこの「いとほし」では、「大将殿もつらい」のように、密通発覚への源氏の困惑が真っ先に読み取れる。ただし、考えれば当然のことながら密通発覚は朧月夜にも痛手である。「つらい」は源氏のなかだけで完結するものでなく、朧月夜もつらい状況に「死ぬべく」苦しんでおり、そう考えると「いとほし」には、源氏の朧月夜に向けた感情も含んでいておかしくない。源氏はただに自分が窮地にあるか

らつらいのではなく、「死ぬべく」の朧月夜の苦悩を他人事にできない責任を負い、ゆえにつらいというような、相手との関係の絡みついた窮地ゆえに「つらい」のだ。このように「いとほし」の困惑状態は、一見当人の困惑に見えても、他者と深く関わっている。「殿も、いとほしう人々も思ひ疑ひける筋を、心清くあらはしたまひて」（真木柱三五三）も、まったく同様の用例である。「困ったことに」と訳すにしても、（注）養父娘でありながら実はわりない仲だったのではと周囲に疑われるのは、源氏以上に玉鬘が傷つく噂であり、かつこの疑惑の責めは自分の不埒さに帰すのも、源氏は自覚している。単に自分が人に疑われて困るのではなく、他者（玉鬘）も困る状況であり、その原因は自分だと感じている、だから一層困るのである。「いとほし」に玉鬘への同情を読む機微はそこにある。

次の「いとほし」も当人に完結するものではない。

⑤「御事により、内の大臣の怨じてものしたまひにしかば、いとなむいとほしき。」（少女四七）

⑥宮もうちはへて、ものをつつましくいとほしとのみおぼし嘆けにやあらむ、月多くかさなりたまふままに、いと苦しげにおはしませば、（若菜下二六六）

⑤は、周囲が知らないうちに夕霧と雲井雁が恋仲になり、しかもそうと内大臣が知った折の、大宮の言。内大臣は怒りのあまり母大宮の監督責任を言いつのり、二人の仲を引き裂いて雲井雁を自邸に引き取ることを決意するのだが、⑤ではその内大臣の怒りに接した大宮が、まだ事態を知らない夕霧に論している。あなたのことで内大臣が恨むのだたいそう困ったと解し得る言だが、大宮が直面した恨み言はとぼつちりで、根本には夕霧のつらい状況がある。「いとほし」の状況は、大宮だけの問題ではなく、夕霧にこそ大本があるのだ。恨まれて「わびし」でなく「いとほし」と語る大宮の心には、内大臣の恨み言への困惑のみならず、自分以上の怒りを向けられているのにまだ気づいていない孫への憐憫と、こうした事態を防げなかった負い目があるはずだ。大宮自身の困惑とともに、「わびし」では表せ

ない鍾愛の孫への情愛も混じるから、「いとほし」が選ばれるのだろう。

⑥の「いとほし」もまた、④⑤と同じく他者と関わる感情であることを示す叙述がないこともあり、不義の子を妊娠させられた女三の宮の苦悩だけを読みたくなる場面である。ただし構図を考えれば、妻が他の男の子を妊娠した源氏の方にも苦悩や困惑があり、その意味では④⑤と同じく、女三の宮の困苦は光源氏のその原因でもあり、源氏に対していたわしいとか申し訳ないといった女三の宮の感情があってもおかしくはない。にも関わらず⑥の例には女三の宮の光源氏に向ける視線を感じにくく、女三の宮のなかで閉じた感情が強いのは、ここ以外の叙述によるのだろう。つまり女三宮の場合、その心内語がとてもなく、周囲にどんな感情を抱いていたか、読み取りにくいのだ。源氏への感情について言えば、源氏の叱責を極度に恐れていたことはわかるが（例 蹴鞠の場面で、柏木からの手紙を受け取ったときの反応）、どれほどの個人的情愛を抱いていたかは、不明である。このためこの「いとほし」に、望まない妊娠を強いられ、萎縮し困苦する女三宮の心情のみを読むことになる。しかし、「ものをつつましくわびし」ではなく「いとほし」と語ることから、ただに自己の苦しみに困惑するだけではない、源氏に向けた女三宮の情愛を読むことはできないか。自分のせいで源氏を苦しめている自覚や負い目が、「いとほし」の困惑に隠れてはいまいか。「めざまし」（若菜下二二五）という反応が、柏木を見下す宮の誇り高さを示唆するのと同様に、宮なりの源氏への情愛のありかを、「いとほし」は示唆しているのではなからうか。

ちなみに女三宮は、光源氏や柏木、夕霧、薫、小侍従、紫の上など、多くの作中人物から「いとほし」のまなざし

が向けられるが、女三の宮が「いとほし」を感じるのは、  
⑦（源氏が）かくけしきも知りたまはぬもいとほしく心苦しくおぼされて、（女三）宮は人知れず涙ぐましくおぼさる（若菜下二二二）



⑧われさへおろかなるさまに（朱雀院に）見えたてまつりて、いとどうしろめたき（朱雀院の）御思ひのそふべかめるを、（女三宮は）いといとほしとおぼす（横笛三四七）

と、光源氏の他には、女三宮が心から慕う父朱雀院に関わる事態だけである。

ところでこうした『源氏物語』の「いとほし」とは異なり、『蜻蛉日記』の次の「いとほし」は、道綱母一人のみに関わる事態に関わつての情意と見える。

⑨おほやけには、例の、八幡の祭になりぬ。つれづれなるをとて、忍びやかに立てれば、ことにはなやかにて、いみじう追ひ散らす者来。誰ならむと見れば、御前どもの中に例見ゆる人などあり。さなりけりと思ひて見るにも、まして我が身いとほしき心地す（蜻蛉日記・下巻）

⑩この風の簾を外へ吹き、内へ吹きまどはせば、簾を頼みたる者ども、われか人かにて、おさへひかへ騒ぐ間に、何か、あやしの袖口もみな見つらむと思ふに、死ぬばかりいとほし（蜻蛉日記・下巻）

⑨は、八幡祭の見学に出た道綱母が、はなやかに通り過ぎる兼家一行に遭遇し、彼我の圧倒的な差を感じ、もはや兼家の妻とは言いがたいほどのしがない我が身を思い知る場面である。⑩は道綱母が迎えた養女のもとに求婚していた遠度に、風のいたずらにより、打ち解け姿を見られてしまった場面である。どちらも道綱母自身の、みつももない姿が明らかになつたつらさに対してのもので、そこに道綱母以外の人物のつらさは関わっていない。これらの例では、道綱母のなかでつらい状態は完結しているわけで、『源氏物語』にはない用例である。このことをどう評価するべきか。一つには、『源氏物語』では、独特の鋭い言語感覚により限定的な使い方がなされていて、「つらくて自分を見ていたくない」から「かわいそうで、つらくて、見ていられない」へと、「いとふ」ニュアンスが変わつたと考えられる。<sup>(注)</sup>さらにはもう一つ、次節に詳しく取り上げるが、「語り手」の批評としての「いとほし」用法に関わるものと見

るべきかもしれない。『蜻蛉日記』下巻になると、道綱母の視点から世界を語る一人称語りを離れ、物語的視点が時折混じるようになるが、この二例もその語りの傾向と関連があるのではないか。実際は道綱母自身の身に起きたことであるのだが、まるで物語の作中人物を語るかのように、一步遠のいた立場から語る姿勢が「いとほし」に感じられるということだ。

翻って『源氏物語』の「いとほし」では、当該人物自身のなかで完結する困窮ではなく、自身の困窮が他者の困窮に通じている点に大きな特徴がある。その場合、最初の用例①②にも顕著のように、自身に向かう「困る」には独特の傾向がある。玉鬘一行や父中納言は、法師や落窪君に対して「気の毒」とも、自分に対して「いたたまれない、困る」とも取れる感情を抱いている。ここでの自身に向かう感情には、「自分の存在のしかたが原因で何者かを傷つける」(角川古語大辞典の説明)、つまりBの状態について、A自身に何ほどか責任があるとの感覚が背後にある。注8用例①でいえば、B法師の困窮に対し、A玉鬘一行自身のせいとの負い目が明確にある。それがよく窺えるのが点線部分で、責任を感じて宿を変えようとも思うのだが、疲労困憊の玉鬘がやっと寛いだ今、宿を変えるのも不体裁と逡巡し、結局居座っている。このように「いとほし」の周辺では、Bの苦境に対してAが何とかしたり、しようとしたり、あるいはAにもどうしようもないとの言い訳がましい叙述が続くことが多い。注9用例②でいえば、B落窪姫君の惨めな姿について、A中納言には父である自分のせいとの思いがあり、何とかしてやりたくも思うが、妻に牛耳られている身ではどうしようもないと逃げてしまう。そのあたりの心情が点線部、特に「え心知らぬなり」「心ともし給へ」といった言い訳がましい言によく表れている。

目の前の他者の苦境、あるいは避けられない苦境の見通しに対して、何かすべき、この事態は自分にも責任があると思うのに、しかし実際は何もできない、できるのはせいぜい事態の先送りというとき、人はただの同情(心苦し)

とは違って、そんな情けないダメな自分から、あるいはそうした気持ちを抱かせる他者から、目を背けたくなるものだ。「いとほし」の「かわいそうで、見ていられない」は、他者のつらい状況への、負い目が漂うときに、他者への同情だけでは、自分に向かう(1)「つらい、困る、いやだ」感情が湧き出る機微をえぐっているのではないか。負い目が「いとほし」の「見ていられない」感じ、自分に向かう困惑やつらさの源泉だろうということである。その意味ではここで真に目を背けたいのは、はじめに引いた山崎馨が言うように、「わが身」なのだろう。ただし次のように、実際には全く当人に責任はなくとも、「いとほし」を感じている例もある。

⑪中の宮も、あいなくいとほしき御けしきかなと見たてまつりたまひて、もろどもに例のやうに大殿籠りぬ。(総角二五〇)

女房たちが大君に薫との結婚を受け入れるよう言いつのるのを耳にした、中君の心である。薫との結婚を強要される大君の困苦に、中君は同情する。しかしこの結婚問題について、中君に何かする力は全くなく、女房を制する力すらない。無力な中君が姉の前に「いとほし」——ある種の負い目を感じるの、中君の大君に対するもともとの情愛の深さのせいだろう。中君にとつて大君は、ほとんど半身に感ずる大切な相手であるが、にも関わらず結局のところ大君の苦境は大君だけのものであり、救うことも分かつかずともできずただ見ているしかない現実には、中君は負い目を感じず。Bに深い情愛を抱きかつBの苦境が深刻であるとき、どうにも分かち得ない苦を通じてAはBと別人である自分に改めて気づき、自分だけ安穩であるのに負い目を抱く。角川古語大辞典が、「(2)ほぼ『気の毒だ』にあたるが、今日いうところよりも、いっそう痛切である。同情に堪えぬ」と説明を付けたくなるような、「いとほし」に時にこもる「いっそう痛切」の機微は、このあたりに発するのではないか。

「いとほし」は「心苦し」に比べると、対象との間にある種の距離感があるといふ。(註10) (1)「困る、いやだ」に向かう心

があること自体、なるほど対象との間に距離がある。ただし自分の「困る、いやだ」でありながら、自分のなかだけに収束しない、他人のつらさに関わって生ずる「つらい」を、「いとほし」はえぐり出している。あるいは他人の「つらい、困る」に接しながら、ただ「心苦し」と共感同情するのでない、自分に還ってくる「つらい、困る」の機微を、「いとほし」は照らし出す。そこにあるのは負い目というものをはらむゆえの微妙な距離感——苦境にあるBと関わりつつ、Bと一体化できないある種の距離感がもたらす、心の複雑な機微への洞察である。それは「いとほし」という語が、ある種の間人心理の綾——「心同体ではないからこそ気づく他者への思いや関係性を意識化させる、批評性を孕む語だということでもある。そのあたりを次節では、語り手の使う「いとほし」から考えてみたい。

### 三、嫌悪感への「いとほし」、語り手の「いとほし」——「いとほし」の批評性

「いとほし」は、AのBに対する微妙な距離感を内包する語であるだけに、込み入った関係が登場する巻に頻出する。末摘花巻は16例と頻出するので有名であるが、これは

i 命婦が、養君の源氏の関心を買うべく多少誇張して縁者の末摘花の話をしてしまった結果、不似合いな二人とわかつていながら源氏を末摘花に手引きしてしまった。

ii 源氏が、関心の及ぶままに命婦に手引きを強要し、後先考えずに侵入して契ってしまった結果、意に添わない末摘花と関係ができたが、愛情を注ぐ気になれない。

という込み入った事情二つに伴い登場する。iの命婦側の「いとほし」というのは

⑫命婦、あなうたて、たゆめたまへる、いとほしければ、知らず顔にてわが方へ往にけり。(末摘花二八四)

のような用例である。命婦と末摘花には身分差があるが、主従ではなく、命婦はやや末摘花を軽く見ているふしすら

あるのだが、その命婦から見ても、宮家の姫君がいきなり男と直に対する状況はいたわしい。そのうえ命婦の場合、他人事として未摘花に同情していられる立場にはない。命婦が不用意に未摘花を話題にし、源氏との対面の場を整えてしまったせいで、源氏が侵入しこの事態に至ったのは明白であり、未摘花に同情すればするほど、責任を感じて、困ったという気持ちになる。結局命婦は「知らず顔」で逃げ出してしまおうのだが、ここには「見ていられない」の機微がよく表れていよう。見ていられないのは、Bの苦境という以上にそれを招いたA自身の失態なのである。未摘花巻では、命婦が未摘花に向けて感ずる「いとほし」があわせて5例にのぼる。「なかなかなる導きにいとほしきことや見えむ」(同二七八)は未摘花が源氏に飽きられ捨てられる未来を最初から危惧してのもの、「いといとほしき御さまかな」(同二八六)は最初の逢瀬の後、源氏の足が遠のいたのに対しての思い。「いとほしきものから、をかしう思ひなりぬ」(同三〇〇)と「御つづしり歌のいとほしき」(同三〇一)は未摘花の赤鼻を馬鹿にする源氏についての感想である。この2例については後に考える。

さらに多いのはiiの源氏の感情で、8例にのぼる。「(どうも美女らしくない物腰が)心得ず、なまいとほし」(同二八四)「かしこには(後朝の)文をだに(送らねば)といとほしくおぼし出でて」(同二八六)「逢瀬後放置しているのを)いとほしとはおぼしたり」(同二八八)「(放置を責められ未摘花の姿を)思ひやりたまふもいとほしければ」(同二八八)「瘦せたまへること、いとほしげにさらばひて」(同二九三)「(未摘花の醜い姿が)いとほしくあはれにて、いとどいそぎいでたまふ」(同二九四)「いと口重げなるもいとほしければ、いでたまひぬ」(同二九四)「明るい日の光で醜い姿をまざまざと見て)いとほしかりしもの懲り」(同三〇四)である。物越しの対面だと哀願し無理に会わせてもらったのに、侵入して契り結び、その後ずっと放置して未摘花を苦しめたのは、紛れもない源氏のせいなので、「いとほし」が多くなるのは当然であるが、面白いのは最初の1例と最後の方の4例は、いずれも未摘花の

みつともなさに触れての感情でもあることだ。不細工なB末摘花に嫌悪感を抱く——むろん面と向かって嫌悪を示されればBは苦しむし、嫌悪の結果、足が遠のく、別の女性を愛するといった具体的行動に至れば、Bにはつらいのは明白である。だがそうではない段階で、まだ末摘花に何が起きたわけでもないのに、なぜ嫌悪を抱いた時点から「いとほし」なのか。

先に残りの末摘花巻の用例を確認しておこう。まず命婦が源氏に関わって、「なかなか末摘花に会わせてもらえないのを源氏が）いとものしと思ひてのたまへば、いとほしと思ひて」（同二七七）「素晴らしすぎる源氏と同席するには不体裁な末摘花では）はえあるまじきわたりを、あないとほし」（同二八二）の2例がある。また鼻につけた朱が取れないと偽る源氏に紫上が「いとほしとおぼして」（同三〇六）1例がある。このうち紫の上の1例は、他愛のない状況の「いとほし」であるが、見え透いた源氏の嘘に簡単に欺かれて赤鼻姿を真剣にかわいそうに思う紫の上の子どものらしい純真さ、あるいは用例①と同様に、紫の上自身の責任は何もないのに、側に居て止めなかった自分を責めてしまうほど、心から源氏を慕う紫の上の姿を読み取らせる例と言えようか。また命婦が源氏に向ける2例も、さほど同情されたり責任を感じさせたりするようならい事態が源氏に起きていてはならないが、少し源氏が恨み言を言ったり、不似合いな二人が並んでいるのが想像されるとすまない気分になるのは、やはりそれだけ養君の源氏に好意を寄せている、命婦の女心を読むべきかもしれない。

さて、直接の行動には至らず、よってB本人には嫌われてつらい自覚はなく、ただAの感情が動く段階でも「いとほし」が使われていることをどう考えるか。先の命婦が源氏の当てこすりを聞いての反応を「かたはらいたし」でなく「いとほし」としたのも、源氏が末摘花を見下すさまが傍らで聞き苦しいという以上に、源氏の当てこすりをもっともだと思つて命婦自身笑つてしまう、命婦の感情の動きの負い目に光を当てているのかもしれない。末摘花の醜貌

に接しての「いとほし」は、のちの初音巻においても

⑬いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰えしゆき、まして灌の淀み恥づかしげなる御かたはら目などを、いとほしとおぼせば、まほにも向かひたまはず。(中略)今はかくあはれに長き御心のほどをおだしきものに、うちとけ頼みきこえたまへる御さまあはれなり。かかるかたにも、おしなべての人ならず、いとほしくかなしき人の御さまにおぼせば、あはれに、われだにこそは、と(初音一五三)

のように使われている。嫌忌などの感情が動くのは、ある意味源氏にもどうしようもないことだが、それをすまないと感じるのは、同時に末摘花への好意「あはれなり」「かなしき」があるからだろう。蓬生巻で描かれた、待ち続けた末摘花の心根への共感も好意も記憶に新しい。むろん共感や愛情だけではない「嫌悪感」がつい生じてしまい、その意味ではB末摘花との間に微妙な距離はあるが、だが同時に情愛もある。だから、嫌いという感情を持つてしまうこと自体に罪悪感を抱く。嫌いと思う心をもつことに負い目を感じるから、末摘花を正視できないと思ったり、よく見えないようにしたり、早々に逃げ出すのである。こうしてみると「いとほし」にとつて肝要なのは、Bがつらい状況にあるか以上に、AがBの状況に負い目を感じていることそのものであるのかもしれない。

⑭人の上を難つけおとしめざまのこと言ふ人をば、いとほしきものにしたまへば、右大将などをだに心にきき人にすめるを、何ばかりかはある、近きよすがにて見むは飽かぬことにやあらむ、と見たまへど、言にあらはしてものたまはず。(蜚二〇八)

源氏は他人を非難し陰口を言う人を「いとほしきもの」とするので、世間の人が讚えるらしいが髭黒はつまらない男だ、玉鬘の婿にするには不満と思うものの、口に出してはおっしゃらないの意。要は婿候補として髭黒をどう思うかを言い出せば、底意地の悪い陰口となりそうで、そうした自分自身を「いとほしきもの」とせざるを得ないから、髭

黒についてのコメントを避けているというのである。「人の上を…言ふ人」が具体的には誰なのか、物語は語らない。というより、具体的な誰かではなく、自分を含めて人にはありがちな「人の上を…言ふ」人に対して、源氏は嫉妬感と言おうか、正視に耐えないような、ある種の距離感を抱くわけなのだ。これと次の叙述はよく似ている。

⑮よしなからぬ親の心とどめて生ほしたてたる人の、こめかしきを生けるしにておくれたること多かるは、な  
にわざしてかしづきしぞ、と親のしわざさへ思ひやらるるこそいとほしけれ(蜚二一五)

「こめかしき」のみで「おくれたる」ところばかりの人物を見てみると、軽蔑的な感情が、親の育て方への非難も含めて自然と湧きおこる、その情意を、源氏は「いとほし」と言う。つまりない親が大事に育てた子が、おっとりしているのだけが取り柄で、欠点だらけな場合、どうやってこんな子を育てたのかと、親まで情けなくも見える。そのように嫉妬感もさそう親子のありようが、同情かつ困惑の情を抱かせる。単純な嫉妬(「うたてし」)ではなく「いとほし」なのは、つい他人の悪口を言ったり、溺愛しすぎて出来ない子を育てる親子の情を、距離をおいてながら、一方で他人事として切り捨てられないからなのだろう。好ましくない行為だが自分もやってしまいがちなのだ。そう捉える光源氏の人間性は、おそらく作者紫式部の人間観そのものであるに違いない。これは源氏が紫の上相手に人物評を展開している用例であるが、この光源氏の立ち位置に語り手が立つ体裁をとると、次の用例になる。

⑯この老い人の、おのがじし語らひて顕証にささめき、さは言へど深からぬけに、老いひがめるにや、いとほしきぞ見ゆる。(総角二四七)

⑰よく案内知りたまへる人の口つきにては、目なれてこそあれ」とて、をかしくおぼいたるさまぞいとほしきや(玉鬘二三九)

⑱①に先立つ一続きの場面であり、大君のもとに薫を手引きしようとする女房たちが密かに画策している状況を受け



て、⑩ではすべてを知る語り手が、⑪では女房たちの計画自体は知らないが不穏な空気を感じずる中君が、それぞれ大君について「いとほし」とする。また⑬は先の⑬に先行する場面で、ともに年末年始の光源氏と末摘花の関わりを語っている。すなわち⑬末摘花は、平安貴族としては恥ずかしいような下手な和歌をつけて、源氏からの正月用装束の返礼にみずばらしい装束を寄越したので、さすがの源氏も紫上相手に痛烈な嫌味を言う。そして年が明けて正月、⑬源氏が末摘花のもとを訪れると、装束こそ源氏が贈ったものだが、容貌は老いも加わって正視に堪えない、着重ねた袴も珍妙でみづもみもないといった出で立ちの末摘花と遭遇した。つまりどちらにも末摘花のずれた感性が縷々描かれている場面で、それを⑬では語り手が「いとほし」、⑬では源氏自身が「いとほし」と感じている。似た状況への情意であるが、作中人物（中君・光源氏）ではなく、語り手の情意であるのが⑬⑭の違いである。

中君が大君へ、源氏が末摘花へ寄せる「いとほし」には、物語内で築かれてきた関係があった。一心同体と言いたいほどの絆で結ばれていながら結局は別人でしかない大君と中君。あるいは末摘花に嫌悪と言って良い忌避感を持ちながら、他人と切り捨てられない情愛を抱く源氏。ちなみに末摘花は「いとほし」と人々から思われるものの、思う側には立たない。あくまでマイペースに生きる人物なのだ。このように個々の物語内で描かれた人物像や人間関係のもと、負い目を内にゆらめかせる「いとほし」が象られている。だが⑬⑭とは異なり、物語世界の外にいて、作中人物たちとは直接関わらない語り手の目線からも、なぜ「いとほし」が象られるのだろうか。そこに何の情愛なり負い目があるだろうか。一つ言えるのは、語り手が語るることによって物語世界は展開する。当人の知らない間に先走った女房の裏切り計画が練られていることも、当人の知らないところで光源氏から嘲弄の種にされていることも、語り手が語ることで、物語世界の現実となる。「月の少し隈ある立癖のもとに立てりけるを知らで、過ぎたまひけむこそいとほしけれ」（賢木一〇六）、「くはしくは聞こえじ。いとほしう、もの言ひさがなきやうなり」（蓬生三三六）、「か

たはらいたければ、知らず顔にてやをら退きぬるに、いとほしきや」(宿木四二九)、「かくめめしくねちけて、まねびなすこそいとほしけれ」(宿木四八〇) などのように、作中人物たちがその時点では知らない、この先待っている本人にとつてつらい事態——密通発覚の危機とか、みじめすぎる困窮生活とか、女房の裏切りによる貞操の危機とか、あるいは周囲からの非難と孤立を招きそうな恥部とも言うべき愚かしい未練に踏み込んで語ろうとするとき、語り手は「いとほし」と象る。「もの言ひさがなき」とも言うべき、作中人物の困苦をさらす語りである。

「いとほしの人ならはしやとぞ」(宿木四四二)は、本来世間知らずの貴族のはずの薫が、世情に通じ細やかな経済的支援ができるほどの苦勞(体験)を積んできた、その内実を評しての語り手の言である。種々の体験を重ねた薫の苦勞に寄り添うのか、薫に恥ずかしい内情を知られる側に寄り添うのか、あるいはその両方なのかはわからない。いずれにせよ踏み込んで語り尽くすのに負い目を感じずようならい事態がこの先にあることを示唆しつつ、語らねば良いのにその一端を語りはじめ。そこに語り手の「いとほし」がある。

先の『蜻蛉日記』下巻の「いとほし」2例(用例⑨⑩)についても、道綱母が自己完結的に自らを見つめているというよりも、語り手の立場に立って自らの体験を赤裸々に掘り下げる、その姿勢の表れとして「いとほし」を捉えても良いのではないか。ふと気づいたらもう兼家から他人のように遠ざかってしまった、あるいは打ち解け姿を垣間見られてしまった、という道綱母自身の困惑を物語る場面ではあるのだが、道綱母の悲憤や慷慨のなかに語りの視点があつたのではなく、まるで道綱母自身が物語の物語の人物であるかのように突き放して位置づける、その指標として「いとほし」があつたのではないか。兼家への怒りや自らへの悲しみのど真ん中で語り尽くした中巻の「前渡り」とは違って、これ以上踏み込んで語るのが気の毒になるような、もはやいかんともしがたい夫婦の距離を生きる自分を、道綱母は容赦なく象る。自分で自分を「いとほし」——目を背けたいほどつらい存在と叙するとき、苦惱のただ

中でそのまま吐露するのはまた違った、切ない状況が描かれるのだと言えよう。

#### 四、「いとおぼし」「心苦し」の差異が示すもの

光源氏は、明石君の産んだ姫君を后がねとして育てるべく、明石君から引き離して正妻の紫の上に預けた。生木を裂くような子別れの物語は哀切に満ちており、源氏は明確にこの母娘の別れに責任を負っている。当然「いとほし」が多く見られる話であるが、時々「心苦し」も用いられている。その差異はどのような心情を象っているだろうか。

⑱(姫君を紫の上のもとに預けるのは) また思はむこといとほしくて、えうち出でたまはで涙ぐみて見たまふ。(松風四一四～五)

⑲殿もしかおぼしながら、思はむところのいとほしさに、しひてもえのたまはで(薄雲四三〇)

⑳「荒磯陰に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今はたのもしき御生ひ先と祝ひきこえさするを…」(松風四一一)

「…げに生ひさきもいとほしかるべくおぼえはべるを、たちまじりてもいかに人笑へにや(だから)手放せません」(薄雲四三二)

㉑よそのものに思ひやらむほどの心の闇、おしはかりたまふにいと心苦しければ、うちかへしのたまひ明かす……道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに罪や得らむとおぼす。(薄雲四三三～四)

㉒山里のつれづれ、ましていかに、とおぼしやるはいとほしけれど、(姫君を手元に置くと、その愛らしさに引き取って良かったと思う)(薄雲四三五)

㉓待ち遠ならむも、いとどさればよと思はむにいとほしければ、年のうちに忍びて渡りたまへり。いとどさびしき

住まひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて、思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶え間なく遣はず。(薄雲四三七)

②心やすくたちいでておほぞうの住まひはせじ、と思へるを、おほけなしとはおぼすものから、いとほしくて、例の不断の御念仏にこつつけて渡りたまへり。(薄雲四六五)

まず、明石君の明石姫君に向ける感情②を見る。どちらも光源氏の娘としてふさわしくない環境で育つ姫君へと向ける感情であるが、「心苦し」と「いとほし」に描き分けられる差異は何か。松風巻の「心苦し」は明石の浜で育っていた娘のことを回想しての言だが、上京しても二条東院入りを拒む明石君に対し、それなら姫君だけでも紫の上のもとに引き取りたいとの源氏の申し出があつた薄雲巻では、「生ひさきもいとほしかるべく」と娘のことを語っている。考えてみれば源氏の申し出以降、明石君の手元で育つというのは、要は申し出を拒絶したからであり、その意味で明石姫君のいたわしい生い先は、明石君のせいとなつた。その自責の念を、「いとほし」が象っているのではないか。源氏の申し出を聞く前は、血肉を分けた愛しい娘は、自分と一体の存在であつた。ところが源氏の申し出を聞いて、自分は東院入りもためらわざるを得ない卑しい身であるが、源氏を父にもつ娘には輝かしい未来もあり得るのだと、その未来を自分が奪っているのだと、二人の微妙な距離を思い知つた結果が「いとほし」に表れている。

これ以外はすべて源氏の明石君に向ける心情を捉えるものであるが、「いとほし」を基本としつつ、②と③に「心苦し」が見られるのが興味深い。なぜこは「心苦し」となるのだろうか。⑧は、心に明石姫君引き取りの件を思い決めつつ、さてどう切り出そうかと考えて何も言えなくなつていた場面である。「いとほし」は「自分のせい」との負い目を包含する語であるだけに、何らかの具体的行為に出ようとするとする叙述が続くことが多い(例文の点線部)。母娘を引き裂く決断を一人胸に秘め、すまないと苦悩する光源氏は、明石君と顔を合わせていても心は遠い。⑨は明石

君に申し出たのち、今後の予定を尋ねる手紙を二条院から送る場面で、源氏は重ねて引き取りをどうするかにつき、言及すべきなのだがすまなくて書けない。それに対して明石君の方から娘の未来に言及した文面が⑳の二つ目の例になる。㉒㉓㉔の「いとほし」は、姫君を都に引き取ったのち、大堰に残った明石君のことを思いやる場面のもののである。いずれも自分の手で引き裂いてしまった母娘の仲に心を痛めつつ、源氏ははるばる大堰を訪れることになる。これらの「いとほし」を見ると、物理的(㉑㉒㉓㉔)もしくは同席していても心理的(㉕)に、源氏と明石君との間に距離があるのが大きな特徴である。対して㉖の「心苦し」はいわゆる子別れの段であるが、ここでの源氏は、目の前の引き裂かれてゆく母娘の哀切な姿に対し、「いとほし」が滑り込む隙間もなく、まるでこの別れの責任が自分にあつたのを忘れたかのように、全身で共感しているのだ。あるいは、申し出は源氏の責任であるが、申し出のあと子別れを決める責任の一端は母の明石君も担うから(㉗)、逆に源氏は負い目よりは、そう決断しなければならなかった明石君の心に全的に共感して受け止める側に立てるのかもしれない。なるほど源氏は当初二条東院に母娘一緒に移ることも提案したのだから、大堰に明石君が残り、姫君だけ紫の上のもとに行つたのは、身分を思う明石君のせいとも言える。とはいえ実際に姫君を引き取り明るい二条院に比べ、離れて寂しいだろう明石君を思えば負い目を感じ、「いとほし」と思う(㉘㉙㉚)。「いとほし」「心苦し」はそうした微妙な差異を象つていよう。これらに比べ、㉛の「心苦し」は、前文の「いとほし」を受けて源氏が大堰に行つている間のことか、それとも後文に「手紙を送つた」とあるように、都へ戻つてからの心情なのか、判別しがたい。あるいは源氏が訪問して、哀切な明石君の姿を直接見たときの心情を引きずつての情意だと示すべく、「心苦し」が選ばれているのかもしれない。

明石君の子別れの段に關わつて、「いとほし」「心苦し」の使い分けを見てきた。「いとほし」には、相手とのあいだにある種の距離感が存在しているが、しかしそれは必ずしも「心苦し」の方が痛切であることを意味しない。なぜな

ら、人間は別々の存在であり、もどから他者と合一できはしないからだ。「わがことのように共感する」のは、そうできる状況での、ただの錯覚かもしれない。血を分けた我が子に対する一体感のもと「心苦し」と思っていた段階よりも、我が子は源氏の子でもあつて、自分から離ればその血にふさわしく后がねとして育ち得るのだと、自分と我が子の距離を理解したことで「いとほし」と思い、結局娘を手放してゆく段階の方が、痛切な娘への思いということもできるだろう。また源氏の明石君への心にしても、すぐ側で「心苦し」と母の悲しみに一体となっている時よりも、離れて「いとほし」と見つめている時の方が、血を分けた母娘を引き裂いた自分の罪深さを正しく受け止めているのだとも評せよう。

②⑤ かくまだ世馴れぬほどのわづらはしさこそ心苦しくはありけれ、おのづから、関守強くとも、ものの心知りそめ、いとほしき思ひなくて、わが心も思ひいりなば、しげくともさはらじかし、とおぼしよる。(常夏二三五)

養女と引き取っておきながら恋情を抱いた源氏の葛藤が読みどころとなる玉鬘物語では、源氏は頻繁に玉鬘に関わって「いとほし」と感ずる。②⑤はそのなかでも「心苦し」と近接して用いられる例である。処女である「世馴れぬほど」は「心苦しくはあり」、夫を持った「ものの心知りそめ」は「いとほしき思ひなく」と、対比的表現となっている。さて、「世馴れぬほど」から「ものの心知りそめ」に変わったとき、「心苦し」がなくなったかはわからない。言及がないからである。しかし「ものの心知りそめ」で「いとほしき思ひなく」になったということは、それ以前、「世馴れぬほど」では「いとほしき思ひ」はもちろんあったことを示唆しているよう。処女の玉鬘を強引に口説き落とすのは面倒さがあり、「いとほし」も「心苦し」もあった。しかし妻となって玉鬘が男女の情を知ったあとは、「いとほし」、つまり負い目はなくなる。なぜなら玉鬘の方でも源氏を受け入れる心が自然と生ずるからである、そうした源氏の計算が行間から読み取れるのではないか。「いとほし」を感じない源氏はいかにも小ずるい。

最後に「心苦し」のみならず「いとほし」が使われる、女三宮の妊娠に対する源氏の心情を見てみよう。女三宮は不義の子を妊娠し、当然源氏は宮に距離を置くようになるのだが、華奢な宮には妊娠生活はつらく、源氏の冷たさに苦しみ、ついに出家を願いだした。

②⑥御心のうちには、まことに、さもおぼしよりてのたまはば、さやうにて見たてまつらむはあはれなりなむかし、かつ見つつも、ことにふれて心おかれたまはむが心苦しう、われながらもえ思ひなほすまじう、憂きことのうちまじりぬべきを、おのづから疎かに人の見とがむることもあらむが、いといとほしう、院などのきこしめさむことも、わが怠りにのみこそはならめ、御悩みにことつけて、さもやなしたてまつりてまし、などおぼしよれど、また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひさきを、しかやつさむことも心苦しければ、(柏木三〇二)

②⑦つれなくて、恨めしとおぼすこともありけるにや、と見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。(柏木三〇八)

②⑥は密通を許せない源氏が、宮自身が出家を望むならその方が良いとも考え、また出家させてはかわいそうだとも逡巡する場面である。何かにつけて源氏から隔て心を持たれてしまう、あるいはまだ若い身空で髪を下ろす、など、直接いたわしい女三宮の姿に接すると、源氏の心には「心苦し」が満ちる。まるでわがことのように宮の苦しみに共感するのだ。一方「いとほし」は、このよそよそしい夫婦仲を第三者がどう見るかを意識した時の情意である。夫から捨てられかけた妻と見える宮のつらさを思いつつ、それが世間には源氏のせいと見えるのを意識すると「いとほし」、困惑する。ここでの源氏の負い目は、世間からの自分の評価を意識して初めて生じている。

ところが②⑦では、直接女三宮の姿を見ながら「いとほし」と感じている。②⑥にあるように、源氏は宮の願い出を聞

いたとき、産後の肥立ちを理由に宮の願いをかなえ、夫婦でなく尼生活の後見という形をとるのが人目にも穏やかとも考えた。しかし宮の哀れさを見るにこの若さで出家させるに忍びず（「心苦し」）、結局は反対した。そののち宮の願いに応じ、宮の父朱雀院が夜陰に乗じて仁和寺を出て宮のもとを訪れ、院自身の手で出家させようとしたときも、同じく源氏は反対したのだが、それに対し宮は無言のまま首を振り、「いとつらうのたまふとおぼしたり」の様子だった。そこに続くのが㊦である。宮の無言の拒絶に、自分に対する深い不信を感じた源氏は、宮は何も感じていない風だったが、これまでの源氏の態度、とりわけ紫の上発病後は紫の上につききりになり、全く宮を顧みなかった日々を、恨めしく思う時もあったのだと悟る。周囲の言うままに振る舞う人形などではなく、一人の人間として、源氏の知らない心を抱いていたことに初めて気づいたのである。そうした源氏の女三宮への距離感が「心苦し」から「いとほし」への転換に表れていよう。今まで「心苦し」と思えたのは、自分のせいで女三宮を苦しめていることに、いまひとつ思い及んでいなかったからに過ぎなかったのだ。

##### 五、やういじ——総角巻の「いとほし」「心苦し」

「いとほし」を一語で現代語に置き換えることは難しい。このような状況での感情の捉え方を、現代ではしないからなのだろう。現代でも俗語的な言い回しで、「イタイ人」といった「イタイ」の使い方はある。目を背けたくなるような、恥ずかしい他者や事態を表す表現である。あるいはこの感覚に少し似ているかもしれないが、「いとほし」には、もっと対象への情愛があり、対象のつらさに心を痛めつつも、自分の負い目が刺激されて、目を背けたくもなる感じを言っている。「いたわしい」にも近いが、そうやってただ相手に同情しているのが許されない、自分に還ってくる感じがある。「困る」にも似るが、自分のなかだけで完結せず、もっと相手を思うまなざしもある。どこか



「自分から目を背けたい」のニュアンスを伴っているのである。こうした「いとほし」が頻出する物語には、複雑に絡み合う人間関係とそれゆえの苦悩が背景にあると言つてよい。

総角巻では「いとほし」及びその派生語は25例にのぼり、とりわけ多い巻である。この巻では主人公薫が、恋する大君は自分と中君が結婚することを望んでいることを知りつつ大君に迫り、ついに大君の願いを無視して浮気者と評判の匂宮を強引に中君に取り持ち、しかもその匂宮は身分ゆえ宇治から足が遠のいて、姉妹は絶望する。女房たちは女主人である大君の心に逆らつて薫と大君を結びつけようとする。大君は妹中君の気持ちを無視して薫と取り持とうとし、結果中君は匂宮と結ばれ、しかも匂宮は通つてこない。中君は姉大君が不本意にも薫と結びつけられそうな状況に心を痛めるが、自身の結婚は望んでいない。こうした入り組んだ事態のなかで、「いとほし」が相互に飛び交うことになる。要は皆が相手の思いを無視して事態を動かそうとするが（だから負い目に）、互いの願いはくい違っているから、自分が最初に思つていたのとは違う方向に事態は展開し、当初考えていた以上のつらさを相手に味わせることになり、いっそう「いとほし」になるのである。

相互の思惑が複雑に入り乱れながら、悲劇へとゆっくり転じてゆく総角巻の物語をえぐるのに、なるほど「いとほし」は最適の語なのである。ただし興味深いのは、このもつれ合う物語のなかでただ一人匂宮だけに「いとほし」がない。匂宮が中君と結ばれたのち、母明石中宮の諫止のため宇治から足が遠のき、かつ権勢家の夕霧の娘六君と匂宮との結婚の噂を聞くなかで大君は絶望を深め、病み、死に至つた。大君の死に匂宮は深い関わりがあるのだが、匂宮は中君に「心苦し」は感ずるものの「いとほし」は抱かない。自身の言動がどう大君に影響を与え、死に関わり、中君を苦しめたかへの匂宮の無知が、「いとほし」でなく「心苦し」と、すなおに中君と一体化できる姿から浮かび上がる。坊ちゃん育ちの匂宮は、負い目を感じることなく、中君の悲しみに寄り添っている。

また、父宮の喪に服した喪服姿の大君のもとに強引に侵入し、大君の抗議を受けて「いとほし」と思つて以降、大君、中君、匂宮（心ならずも中君のもとに通えないのに焦れる）にまつわつて計11例の「いとほし」が繰り返される。薫の方も、十一月の大君最期の日々では「いとほし」は陰を潜め、「心苦し」のみになる。<sup>(注1)</sup>そもそも薫の「いとほし」は、大君の思いに逆らい続け、ついに中君と匂宮を結びつけてしまふ（八月末）さなかや、その記憶も新しいころ（九月初旬）までに頻出し、その後は薫は遠く都に離れて思いを馳せるときに散見する（2例）程度になっていたので、都での公務（新嘗会・豊明節会）さえも投げ捨てて、大君につききりとなる日々が「心苦し」一辺倒になるのは、むしろ当然なのかもしれない。

とはいえ大君の最期が、端で見ていられない肉体的苦痛を伴うものでなく、ただ「ものの枯れゆく」（青表紙本多く。大島本・河内本など「ものの隠れゆく」）ように衰弱して、声を発する力も自らの思いを通す気力もなく、従順に薫の世話を受け入れる日々だったことを思うとき、「心苦し」の一体感、「いとほし」の距離感、ひいては人間の関係性というものを考えさせられる。実を言えば、中君の結婚生活への責任感に加えて、中君でさえ不幸になるのだからまして自分が薫と結ばれて最後まで穏やかでいられるはずないと絶望したことから、大君は「おぼししづむに心地もまことに苦しければ、ものもつゆばかり参らず」（総角三〇〇）と食を絶ち、衰弱していったのだった。死を決定した自分の心には気づかず、なりふり構わず大君の看病に意を尽くす薫の姿に心は揺さぶられるもの、ここまです世話を受けた末に健康が回復すれば薫と結婚せざるを得ない、薫をはじめ誰もが出家して結婚を拒みたい大君の心は許してくれない、それならば死ぬしかないのだと、そして死ぬからにはせめて薫の心に美しい自分を残しておきたいのだと、そう思う大君の最期の日々の、薫に対して従順でやさしい振る舞いが、対象と一体となつての共感、「心苦し」を可能にしたのだった。大君がもはや心の底の思いを誰にも伝えることなく、どうしたいと特に主張すること

の無い日々が、薫の「心苦し」や、大君の中君への「心苦し」の背景にある。人間はかくも別々の存在なのである。

## 注

註1 山崎馨『形容詞助動詞の研究』（泉和書院、一九九二）。初出は一九七三年。

註2 「いとほし」の先行研究は、ほぼこの二義のどちらに振り向けるかに論が集中する。『王朝語辞典』（東京大学出版会、二〇〇〇年）の「いとほし」の項では（池田節子担当）、「どちらの語義を適用するかによって内容まで変わってしまう語義など両立しない」として、二つの解釈を包含するニュアンスを求め、「自分自身をかわいそうだ、みじめだなどと憐れむ気持のこもらない、単なる拒否感覚の、困る、いやだという語義は、『いとほし』にはない」とする。これは「気の毒、かわいそう」といった憐憫の情を「いとほし」全体を貫く情意と捉え、それを他者でなく自己に振り向けると「困る、いやだ」になるという理解であろう。ただしこの理解では、なぜ自己に憐憫を振り向ける事例が生ずるのかがよくわからない。本稿では、他者への「憐憫」が生じやすい、「他者がつらく困った状況にある」なかで、なぜ自己に向かう「つらい、困った（見ていられない）」感情が生じるのかについて考える。

註3 『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』の検索結果による。従って浮舟巻以外は大島本、浮舟巻は東海大学付属図書館蔵桃園文庫源氏物語（明融本）が底本である。引用する本文はこの古典大観の校訂本文を基本としつつ、一部わかりやすく表記を改めている。また参照の便宜のため、全体に新編日本古典文学全集の当該箇所ページの数をあげる。

註4 陣野英則『総角』巻の困惑しあう人々——「いとほし」の解釈をめぐる（『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』笠間書院、二〇一六年に所収。二〇一〇年初出）が、これまでの陣野自身の「いとほし」関係の論考、および先行研究への言及が簡便にまとまっていて、非常に有益である。これをたどることで、これまでの「いとほし」研究の方向性がほぼ確認できる。ただし本稿では、最初の「問題の所在」でも言及したように、「いとほし」の二つの解釈のいずれが本義かを認定するのではなく、『源氏物語』の用例をもとに、「いまつらく困っている、あるいは必ず困るであろうBの傍らで、Aが抱く感情」として「いとほし」が出現すること、そのときなぜAの「つらい、困る」の義がうまれるのかを考えるため、おのずと論の展開の方向性や結論は異なる。

註5 注2の『王朝語辞典』など。

註6 濱橋頭一補助論文32（『源氏物語の鑑賞と基礎知識 真木柱』至文堂、二〇〇四年）。

註7 注1山崎の挙げる宣命の用例は、他者とは無関係な、自分の恥への「つらくて自分を見ていられない」で、『蜻蛉日記』の二例と同じ形である。本稿では『源氏物語』を中心に確認し、先行する用例は一部確認したに留まるので、語誌の考究ではないが、「いとほし」を語源とみれば、「つらくて自分から目を背けたく思う」が原義なのかもしれない。その場合、つらくて自

註8

分から目を背けたい状況（理由）が、恥辱など自己内で完結するものから、他者の苦境への自責や負い目など、他者と関わって生ずるものにシフトし、結果として表面上「心苦し」に似た状況に対する情意へと変わるなどの展開が確認できるのか、他作品と比較し、さらに考察を重ねたい。

山崎良幸『源氏物語の語義の研究』（風間書房、一九七八年）は、「いとほし」の第一義として「われの行為に対する自責の念」をみる。『古語大鑑』でも語義の分類のなかに「(他者に対する自分の言動について)申し訳ない。心苦しい」の項目を立てる。なお山崎はさらに細かく分けて別の語義を立てるが、例えば、空蟬の冷たい拒絶に傷ついた源氏が、現在は音信不通になっているものの、「強ひていとほしき御ふるまひの絶えざらむも」(空蟬一八八)の「いとほし」は、「若い源氏が自分に拒まれて、傷つき苦しむのを見るにしのびない気持(新全集頭注)であり、「自責の念」と解し得る。このように別の語義を立てている用例も、くわしく検討するにむしろ全体として「いとほし」は、「自責の念」を読むべき語と考える。

註9

事態を何とかする叙述が続く点は、「わびし」と「いとほし」の違いである。「いとほし」のうち、女三宮と柏木の密通を宇治の姫君たちが聞き知っているかもと想像するに「ねたくもいとほしくもおぼゆる」(権本二〇一)の例などは、かの密通が知られば薫自身の出生の疑惑ももたらすから、「負い目」とは無関係に、直接的に薫も困る例である。このように負い目に関わらず、他者(女三宮たち)にも自分(薫)にもつらい状況を「いとほし」とする例もあるが、いずれにせよ何とかしようとする叙述が続く。右の例では、薫は醜聞漏洩を防ぐために、宇治の姫君たちを妻にしようと考えているのである。

註10

「心苦し」との語義の差異を考える際に、もつとも注目されるのがこの距離感である。鈴木日出男『源氏物語の文章表現』(一九九七年)、注2『王朝語辞典』、中川正美『平安文学の言語表現』(和泉書院、二〇一一年)など。多くの用例を博搜した中川は、「いとほし」について、「一步離れた位置から第三者的にかわいそうに思う」「ひとごと表現」と結論づける。本稿でも、「いとほし」には「心苦し」とは異なって、相手との距離感があると考えるが、それが必ずしも常に「いとほし」の冷たさを意味するとは捉えない。距離がありつつも他人事と切り離せない、自分に選ってくる「かわいそうで、見ていられない」を本義と考えるからである。

註11

注4の陣野論文に既に指摘がある。

キーワード

いとほし、心苦し、負い目、共感